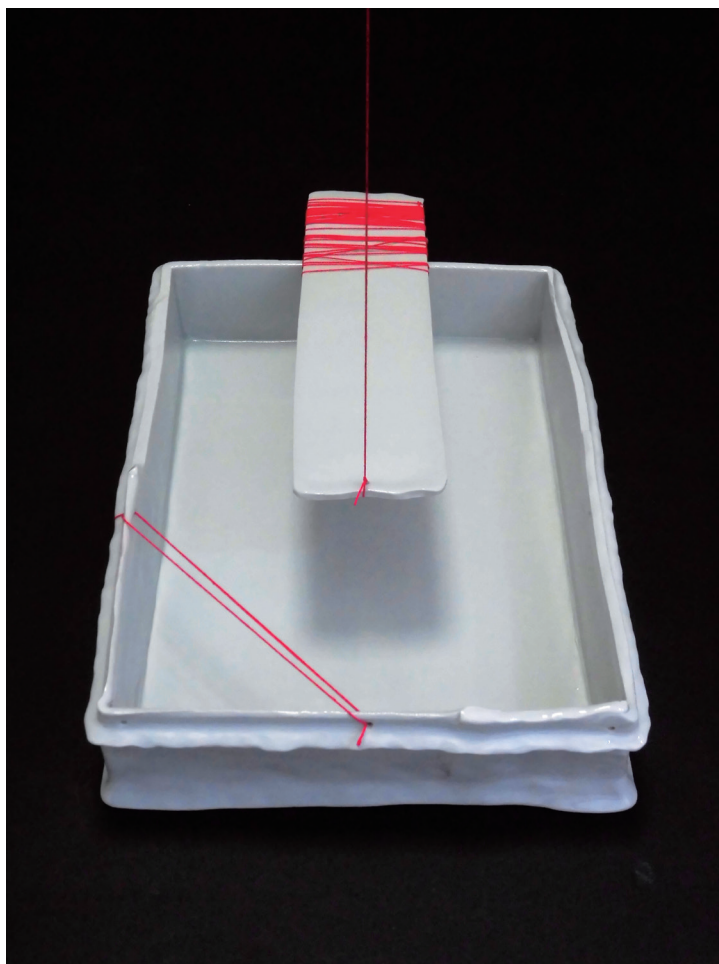


アート・ギャラリー

白 磁  
＝日登美美術館＝

石 田 成 昭

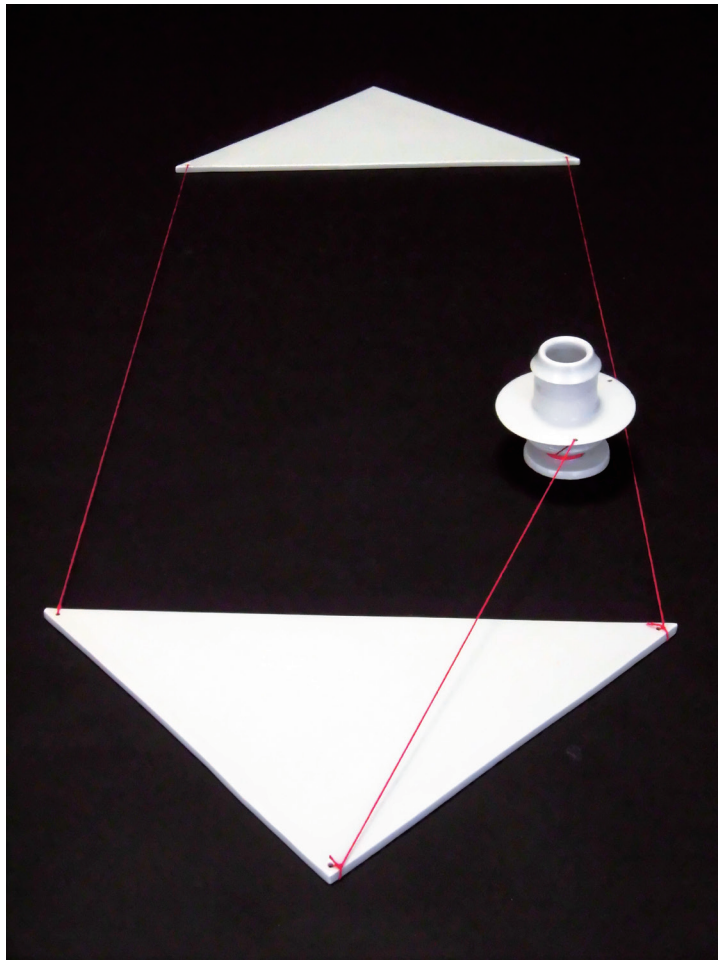


奈野 578 高 8cm

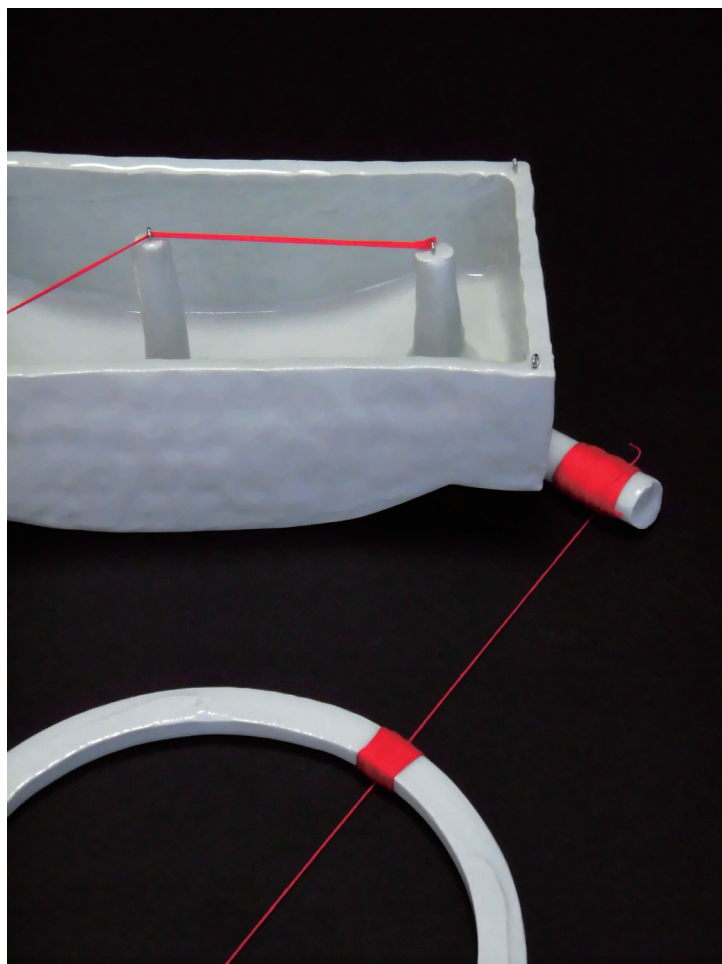
一日登美美術館—

名神八日市インターチェンジから紅葉で有名な永源寺方面へ自動車で行くこと 10 分、日登美美術館がある。この美術館は大阪に本社のあるアパレルメーカー日登美（株）の創業者・故図師禮三氏が自身のコレクションを郷里に保存・公開することを目的に建設されたものである。バーナード・リーチの陶器、ミロの版画、広重の浮世絵など 1000 点余りを所蔵している。滋賀県の地方新聞でこの美術館の案内《リーチ作品 300 点日本一》を目にし半信半疑ながら出かけてみた。この辺りは近江米の生産地で見渡す限りのどかな田園風景が広がっている。美術館は鋼材とガラス張りの現代的な建物で玄関脇にはおしゃれな赤のクラシックカーが置かれていた。少し風変わりな美術館だなと思ったが、たぶん図師の愛車（？）だったのだろう。リーチ作品はドーム状の広いスペースの陳列ケースに収められていた。日常生活と密着した素朴で温かみのあるリーチ作品は芳醇な香気を放ち私には十分満足できるものであった。図師もリーチ作品に魅了されこれだけ多くの作品を収集したのだろう。リーチは幼少期京都、彦根に滞在歴があり英国へ一時帰国、美術を学ぶも再来日。『民藝運動』の柳宗悦、富本憲吉らと深い交流があり、英国の軟陶に始まり中国、朝鮮、日本のありとあらゆる技法を修得し、後輩のルーシー・リー、ハンス・コパーらにも多大な影響を与えたと言う。私も学生への良きお手本として大いに参考にさせて頂いた。この英国人 3 人をなぞれば陶芸の基本はほぼ完璧である。中でもリーチの水注のハンドルは秀逸で、取っ手文化の無い日本人にはとても興味深い。胴体から力強くしなやかに延びるハンドルは実用的かつ優美な姿を見せる。エッチング絵画出身のリーチは確かな描写力で陶器の絵付けにも力を発揮している。この美術館にもある鉄砂抜絵巡礼者模様皿はリーチの自画像のように思えてならない。弛みない陶芸の求道者を焼物ならではの技法で哀愁のおびた作品に仕上げている。前述の図師は大のワイン好きでワイナリーを 60 歳にして設立、濁りワインを生み出し又それに合うパン製造にも着手、美術館に併設されたパン売り場にある陳列台がこれまた素敵な西洋家具で図師のセンスの良さがここにも窺える。遠い異国の片田舎でリーチ作品が大切に保管されている姿に大きな拍手を送りたい。

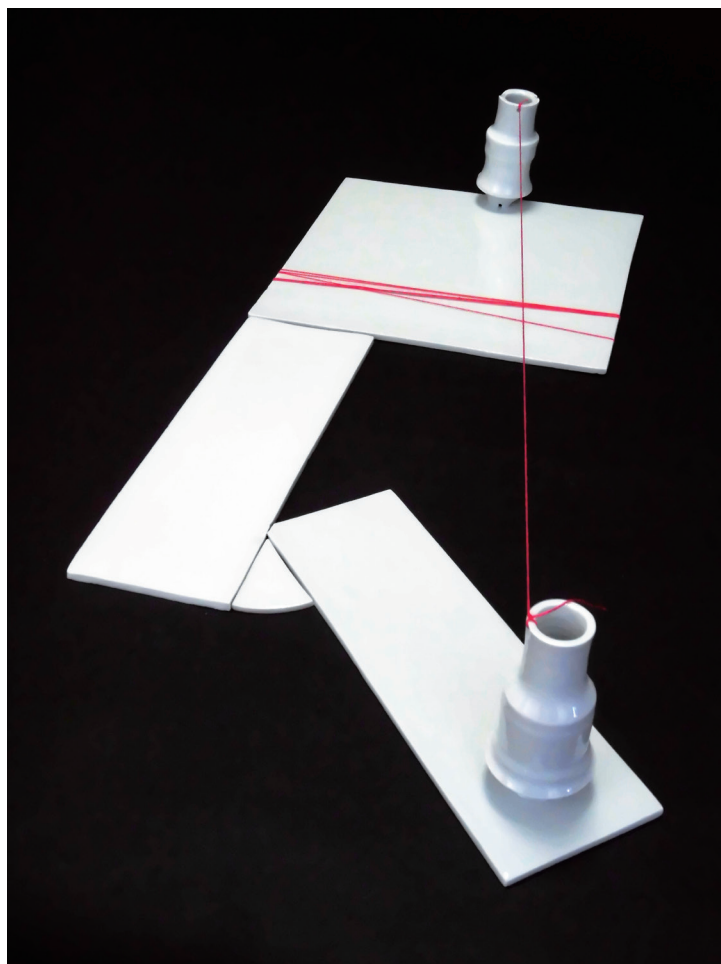
図師のこす リーチの壺と にごり酒  
ヒトミ輝き 皆五つ星



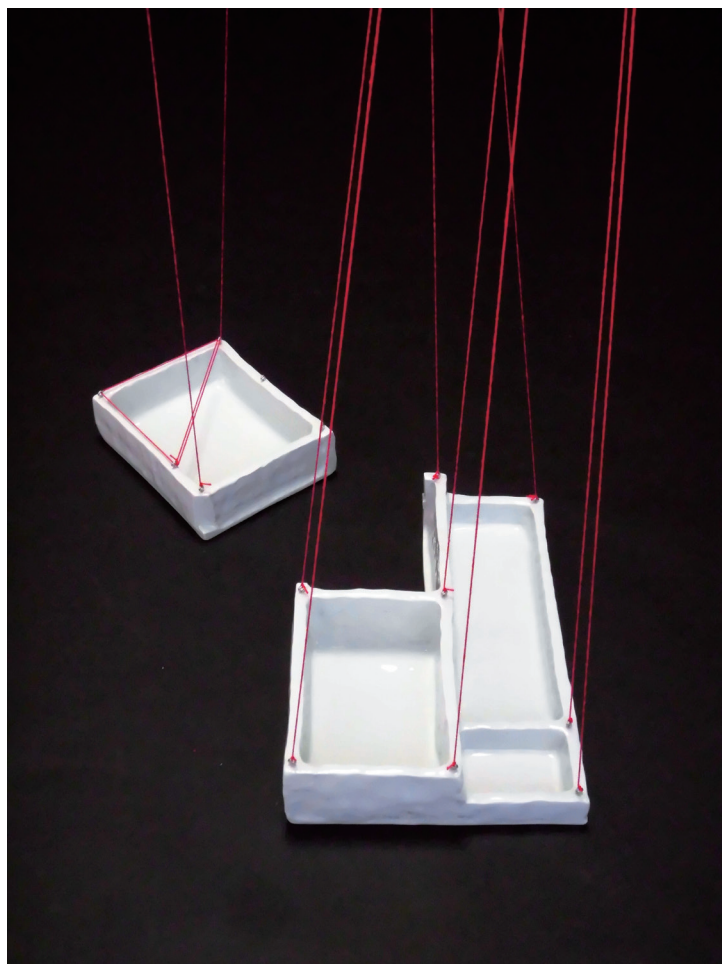
奈野 5 8 6 高 9cm



奈野 585 高 10cm



奈野 5 8 7 高 12cm

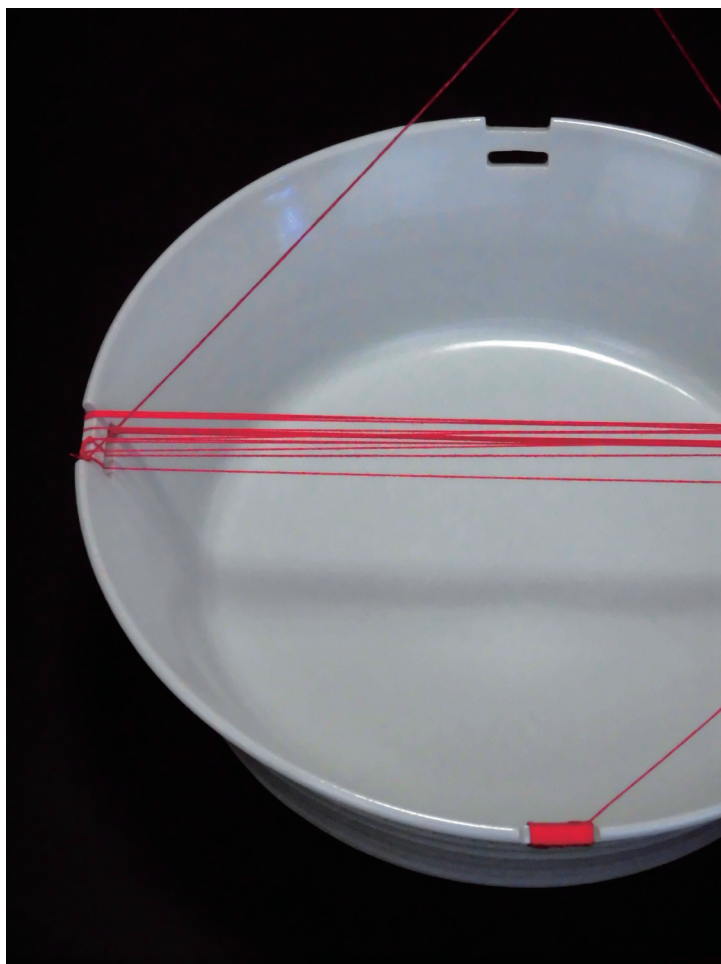


奈野 579 高 7cm

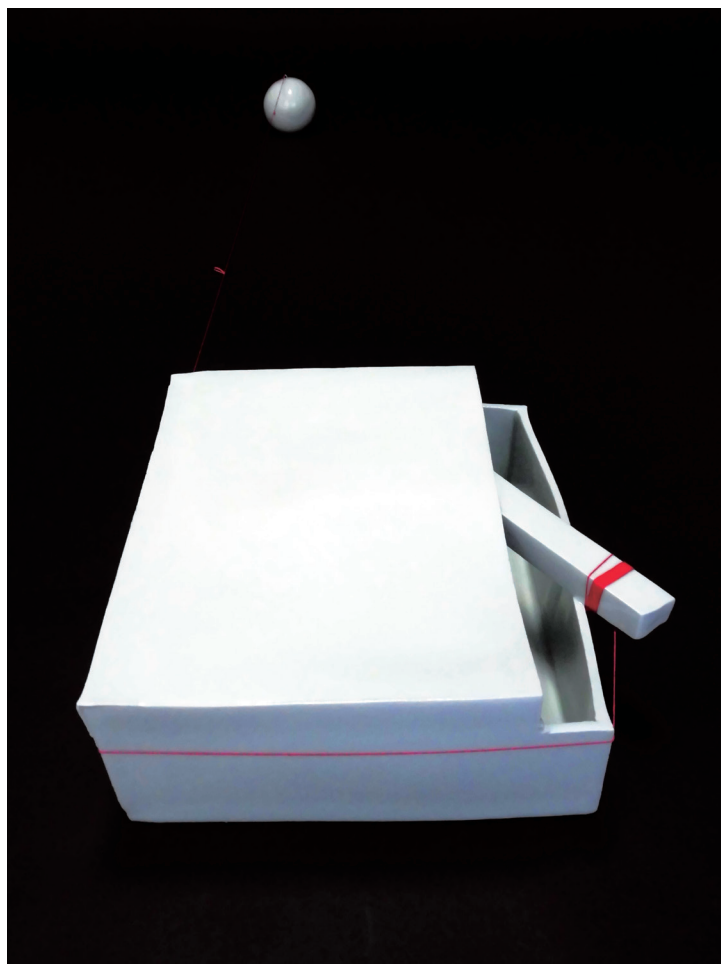


奈野 5 8 1 高 12cm





奈野 5 8 3 高 12cm



奈野 5 8 4 高 13cm